ペンテコステの説教とペンテコステ「派」の説教[1]

大坂太郎

はじめに

編集委員会から執筆者に提示されたテーマは「ペンテコステ派の立場から、信仰あるいは信仰義認について考察する」であった。それを見てすぐ脳裏をよぎった問いは「上記テーマにおいてペンテコステ派と福音派の間にさほどの差異を見いだせるのか？」であり、個人的な答えは「大きな差はない」であった。勿論これは専門的な研究を経てというものというより、ペンテコステ派の教会でこの道に入り、福音派の神学校で学び、ペンテコステ派の神学校で教え、現在福音主義神学会の働きを担う一人として両派の中間点に立ち続けてきた者としての体験的な確信に過ぎない。こうした懸念を編集委員に吐露したところ、もう少し広く「ペンテコステ派の特色が描き出される論考であればよろしい」との励ましを頂いた。それを受け、改めてペンテコステ派の信仰の特色は何かと考えると、真っ先に去来したのは「聖書に書かれていることはどの時代においても変わらず起こる」という単純な確信であった。一例を挙げれば「聖書には聖霊に満たされて外国語で神の業を語ったという記事があるのだから、聖霊の満たしを受けるとき、どの時代であっても（よしそれが奇異にみえたとしても）そのようなことはいまも起こる」といった考え方である[2]。ペンテコステ

---

[1] 本論文は日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の定期刊行誌、『講壇』40 号（2014 年 11 月発刊）に掲載されたものに必要な修正を加えたものである。

[2] しかしこれとてもペンテコステ派特有の考え方とも言えない。むしろ福音派に広

派において聖書の記述はどの時代にも再現が可能な、開かれた神の物語なのであり、再現可能な、そして再現すべき範例なのである。

そこで本研究では「使徒の働き」の中に描かれた説教に着目し、それを範例として「ペンテコステ信仰の正しい発露としての説教」について考察する。紙面の関係もあり、その範囲を使徒の働きの前半部にあるペテロによって語られ、ルカによる編集を経た三つの説教（ペンテコステの日の説教、美しの門での説教、コルネリオ家における対話的説教）に限定し、それらを概観した上でペンテコステ派の教会が範例として掲げる初代教会の説教の特質を考察し、合わせて現在ペンテコステ派の諸教会で語られている説教が、彼らの標榜する聖書の示すその通りのものを語っているかについて批判的な考察を行いたい。

Ⅰ．ペンテコステの日に語られた「説教」（使徒 2:14–42）

使徒 2:14–42 に記録されているペテロの説教（あるいは演説）は聖霊の大傾注とそれに伴う一連の尋常ではない出来事（激しい風が吹いてくるような響き、炎のような舌、他国の言葉で語るという現象）によって、多くの人々が弟子たちのところにあつまってきた時に語られたものである。もっともこの 28 節に書かれているものが、かの日ペテロが語ったもの全てでないことは「ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、証しをし（以下略）（2:40）」という記述によっても明白であるが、これが信頼のできる説教の要約であることは言うを俟たない[3]。更にこの日ペテロが語った説教は聖霊の注ぎがヨエルによって預言されたことの成就であることから始められてはいるが、その内容は決して聖霊論に限局されたものではなく、寧ろ福音の告知であり、救済への呼びかけで

範に認められ得る聖書主義（Biblicism）の先鋭化した形といっても良いように思う。聖書主義に関しては小島崇氏のブログ、「大和郷にある教会」に有益な情報が提供されている。詳しくは以下を参照のこと。
https://sugamo-seisen.blogspot.jp/2011/10/blog-post_03.html

[3] I. H.マーシャル、『使徒の働き（ティンデル聖書注解）』（いのちのことば社、2005 年）83 頁

あった。

A．ヨエル 2:28–32 の引用と解釈

この説教においてペテロは自らが体験し、多くの人々が見た聖霊降臨の出来事を「酒に酔っているのだ」という低いレベルの説明に留めることがないよう、この出来事が聖書の預言に基づくものであることを述べるために、ヨエル 2:28–32 を引用している。この引用は基本的には七十人訳に基づいているが、文脈に合わせて神学的な修正が加えられている[4]。もっともこれは当時においては自然なことであった。彼らは表現を正確に書き写すことより、意味を正しく伝えるために必要な修正を優先したのである[5]。

その修正の最たるものが、ヨエル書では「その後」となっているところが「終わりの日に」と編集されていることであろう。この意図は明白である。この改変により、ペテロはこの聖霊の大傾注は神の最終的な救いのみ業の成就であり、終わりの日の始まりであることを主張したのである。このように考えるとペテロがヨエル書を引用したのは単に外国語を語ると言う現象に聖書的な根拠があるということだけを言おうとしたのではないことは明白である。もしそのようなことが眼目であったなら、引用はヨエル 2:28、29 だけで十分であったはずである。しかし実際にはペテロ（そしてルカ）は 32 節までを引用している。その理由はひとえにこのペンテコステの出来事が救済史的な意義を持っているからにほかならない。そしてそれこそがこの説教の基調音なのである。実際この説教を聞いた者は賜物として聖霊を受け「救い」を得た。ゆえに当該文脈における聖霊論が救済論との不可分の関わりを深くもっていることはこれ以上なく明らかなことである[6]。

[4] マーシャル、84 頁

[5] 同上。

[6] しかしながら 1980 年代以降のペンテコステ派、特にクラシカル・ペンテコステ派(或いは第一の波）に属する聖書学者たちはこうしたルカ文書の聖霊論には救済論の結びつきがないと主張する傾向がある。その主要な唱導者には R.P. Menzies がおり、邦語でも出版されている。ウィリアム・W・メンジーズ、ロバ

B．詩篇 16:8–11 の引用と解釈

続いてペテロはこのエポックメーキングな聖霊降臨の出来事を御子イエス・キリストの受難、死、そして復活と関連付けるのだが、受難と死については改めて語る必要はない。というのも皆がその出来事を知っているからである。だが、復活については違う。復活の事実があったということだけではなく、それが神によって計画され、聖書にしるされていることであると証明しなければならない。そこでペテロが採用したのが詩篇 16:8–11 である。しかし、どうしてこの詩篇がメシアであるイエスの復活を意味していると言うことが出来るだろうか。むしろこれはダビデ自身が自らについて語っていると考えることが当然ではないかという疑問が生じるのである。この疑問に対し、ペテロはまず、ダビデ自身は既に死に、その墓が今日まで残っていることをもって答えとする。死んで墓に葬られた以上、神の聖者であるダビデは朽ち果てたとしかいいようがないのである。だとすれば、この詩篇がダビデ自身のことを指しているとは言えないとペテロは確信を持って説得したのである[7]。

上記の解釈はこの詩篇を理解する上での新しい枠組みを提供している。即ちこの詩篇を将来に渡る預言として解釈するという枠組みである。だがこれは新奇なものではないようである。現にペテロが使徒 1:16 においても「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです」と言っていることを見ても、いくつかの詩篇が将来について語っていることは当時のユダヤ人の間では暗黙の了解事項であった[8]。つまりかの日のペテロによる聖書の解き明し、即ちこの詩をメシアに関する預言が書かれたものとする解釈は、当時のユダヤ人にとっては相応の説得性を持っていたものと考えられる。そしてこの説教者、聴衆ともに理解可能な共通の基盤に立ってペテロはこのメシア預言の成就を復活のイエスに見、それを語ったのである。

ート・P・メンジーズ、『聖霊と力ーペンテコステ体験の基盤』（地引網出版、2014 年）。

[7] マーシャル、88 頁

[8] マーシャル、89 頁

C．断罪と悔い改め

よく説教は「通常礼拝の中でなされる、口頭による聖書の解釈である」[9] と定義されるが、この個所におけるペテロの語りはこの定義によく合致している。しかしそれは「解釈」のプロセスを目的にするものでは決してない。ペテロの意図はむしろ、ヨエル書や詩篇をメシアなるイエスの光によって解釈することにより、聴衆に問いを与え、回答を迫ることにあった。ペテロは 36 節において、まず彼の聴衆をイエスを十字架につけた者たちだとして明白に断罪した。この断罪は功奏し、人々は心を刺され「私たちはどうしたらよいでしょうか」と使徒たちに語りかけた。対してペテロは彼らに悔い改めることと、バプテスマを受けることを強く勧めた。また先にも述べたがルカはこの日のペテロの説教を「この曲がった時代から救われなさい」という勧告によって全体のメッセージを総括していることから考えても、この日の説教の機能が勧告的なものであったことは明白である。

D．まとめ

聖霊降臨日に語られた説教、キリスト教会最初の説教は、降臨された聖霊による一連の奇怪な事象を聖書を解釈することによって明らかにすべく説き起こされるが、その中心にあったものはユダヤ人に殺されたが三日目によみがえったイエスこそが神から遣わされたメシアであり、自らの罪を悔い改めてこのイエスを信じる者は聖霊の注ぎを受けた弟子たちと同じく、賜物として聖霊を受け、この曲がった時代から救われるという、救済のメッセージであった。

[9]「説教」W. H. ウィリモン、R. リシャー『世界説教・説教学事典』日本基督教団出版局、1999 年、242 頁

Ⅱ．美しの門におけるペテロの「説教」（使徒 3:12–26）

使徒 3 章において、ペテロが説教を始めるまでの経緯は、ペンテコステの日の説教と酷似している。驚異的な出来事のすぐ後で、これに驚く群衆を前にペテロは演説を行い、いましがた起こった出来事を説明している[10]。

A．イエスとそのみ名の力（3:12–16）

前章における説教同様、ペテロは聴衆の様子を見、彼らの中にあった誤解、即ち「使徒たち自身が自分の力や信仰深さによって生まれつき足のなえた人を歩かせたのではないか」という誤解を解くかたちで演説をはじめている。

まず 13 節においてはイスラエルの父祖の神がイエスに栄光を与えたことが主張されている。そうであれば、イエスの名によってこのような驚くべき奇跡が為されたのは、他ならぬ神の力によるものとしか考えられないということになる。しかしイエスが神のしもべとして栄光を受けたと宣言すると、ある人は「しかし結局のところイエスは磔になって死んだではないか」と言って、この主張に同意しないことが考えられる[11]。そこでペテロはイエスが十字架で死なれたのは今この話を聞いている「あなたがた」にその理由があるとした。

ここで興味深いのは、この説教におけるペテロのキリスト理解である。この短い語りにおいてペテロはイエスを「きよい方」、「正しい方」、さらには「いのちの君」として紹介している。まず「きよい方」であるが、マーシャルは新約における用例としてマルコ 1:24 とヨハネ 6:69 を挙げている[12]。それらは悪霊がイエスを神の聖者として認識するという文脈や（マルコ 1:24）、また弟子たちがイエスを永遠のいのちをもつ神の聖者であることを信じる告白をするという文脈において用いられている。これらのことから考えるとここにおける「きよい方」にイエスのメシア性を見ることは十分な妥当性を持っているとい

[10] マーシャル、104 頁
[11] マーシャル、106 頁
[12] マーシャル、107 頁

えよう。次に「正しい方」であるが、これはイエスの道徳的高潔さを強調するために置かれていると考えて間違いないだろう。それは人々がイエスを十字架にかける代わりに釈放を要求したのが「人殺し」[13] のバラバであったということからも支持できる。更に「いのちの君」であるが、「君」と訳されているアルケゴスには「リーダー」「前導者」という意味もあるが（参：ヘブル 12:2）、ここではヘブル 2:10 のように創始者と訳すのが適訳である[14]。さらにアラム語においては「救い」と「いのち」は同じ言葉なので、いのちの創始者とは即ち救いの創始者であるという考え方を認めることが出来る[15]。このようにペテロはこれらの三つのことばによって前章において提示されたメシアであるイエスの理解を更に深めていると考えられる。

B．断罪と悔い改め（17–21）

イエスをきよく、正しい方であり、いのちの君であると語ったペテロは同時に、聴衆であるユダヤ人たちに向かい、このイエスを殺したのはあなたがたであると断罪した。しかしこれは決して永遠の滅びをもたらすためだけに為されたものではなく、伝道的な意図をもった奨励への布石であった[16]。ペテロは 17 節において彼らの罪の行いは無知のゆえであったこと、続く 18 節においてはそれが神ご自身のご計画であり、神が実現したことであったことを告げ、その上で罪の赦しの為に悔い改めることと、神に立ち返ることを勧めたのである。この「悔い改め」「罪のゆるし」「神への立ち返り」は 2 章における説教と全く共通するものであるが、他方で異なるものもある。2 章においては「救い」の

[13] バラバについては使徒の働きの第一巻であるルカ 23:25 においては「暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた」と証言されているが、マルコの並行記事（15:7）では「暴動のとき、人殺しをした暴徒たちと一緒に牢に入っていた」、マタイ（27:16）においては「名の知れた囚人」としか記されていない。
[14] F.F. Bruce, *The Book of the Act* (NICNT; Eerdmans, 1988) 82.
[15] マーシャル、107 頁
[16] マーシャル、108 頁

賜物として与えられる「聖霊」[17] の言及があるが、当該段落においてはイエスの再臨について語られている。つまりペテロが説いた福音は単なる現世における解放に留まらない、新天新地をも視野におさめた大きな救済の物語であったのである。

C．イエス－預言されていたあの預言者（22–26）

ペテロは更に申命記 18:15–19、更にレビ記 23:29 の内容にもとづく引用を行うのだが、その論旨は簡単に言えば、メシアであるイエスを申命記やレビ記において語られている「モーセのようなひとりの預言者」になぞらえることにより、イエスに対する信従を要求し、その結果は前章の説教同様、邪悪な生活からの立ち直りと祝福であることを証しするものである。また研究によればこのようなメシアを第二のモーセであるとする解釈はクムラン教団などにも見られるものであるから[18]、ペテロがここで語っていることは、荒唐無稽な当てはめではなく、それなりに当時の解釈伝統に則ったものであるということが出来よう。

D．まとめ

美しの門における生まれつき足のきかない男の癒しをきっかけに語られた説教はイエスとそのみ名の力がアブラハム・イサク・ヤコブの神から来るものであり、それを信じる者には力が与えられるということを語っているのだが、前章の説教と同じく、その帰結は十字架につけられて殺され、三日目によみがえったイエスを信じることにより人はこの現世のみならず終末的にも罪からの救いと祝福に与ることが出来るというものであった。またこの祝福にあずかるためには悔い改め、イエス・キリストの福音によって神に立ち返ることが必要であるという提示がなされている。つまりこれは前章同様に伝道説教であったと結論付けられる。

[17] ここは原文直訳では「聖霊の賜物」であるが（口語訳）、新改訳聖書のように「賜物として聖霊を」と同格的に訳すのは理にかなっている。これにより、Ｉコリントにおけるいわゆる「カリスマ」との区別を明確にできるからである。

[18] マーシャル、111 頁

Ⅲ．コルネリオ家における対話的説教（使徒 10:25–43）

先に取り上げた二つの説教と比較すると、使徒 10 章における説教はその対象において大きな違いがある。前二者がユダヤ人を対象にしたものであるのに対し、10 章はユダヤ教に一定のシンパシーを持っていた「神を恐れる人々(God-fearer)」の一人ではあったが、割礼はうけていない、つまり異邦人であるコルネリオを対象にしたものである。しかし使徒ペテロが語ったのはやはり福音のメッセージであった。

A．私たちはみな人間である（10:25–33）

御使いの知らせを受け、ペテロを招いたコルネリオはペテロが到着するとペテロの面前でひれ伏して拝んだ。しかしペテロはその尊敬を受け入れることを「私もひとりの人間です」といって拒否した。勿論ペテロがこのようにコルネリオの度を過ぎた尊敬を拒絶したのは、第一義的にはそうした尊敬を受けるのはただ神のみであることをペテロ自身がよく知っていたということの故である。ただしこのことばは同時にこの段落における主要な論点を指し示す機能を持っていることに読者は目を向けるべきである。

ペテロは自らが体験した大きな敷布のような入れ物に入った汚れた動物の幻を思い起こしつつ、神がどんな人のことでもきよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくれたと語ったのである。つまりここでのペテロの説教には福音がもたらす真の平等が息づいている。

B．異邦人への福音宣教（10:34–43）

このような経緯を経て、ペテロは驚くべきことを語り出した。それは「神はかたよったことをなさらない（えこひいきをする[19]ような方ではない）」ということである。岸の分析によれば、この出来事は最初の聖霊降臨からほぼ 10 年後のことなのだそうだが[20]、使徒たちがユダヤ教的な排他主義を乗り越えるのにはこれだけの年月と、神の導きが必要だったのである。ペテロはこの事実を「発見」したことを悪びれる様子もなく語り、続いてイエス・キリストについて語ったのである。ここで興味深いことはペテロはこの説教の聴き手が異邦人であることをよく心得ているように思えることである。例えば使徒 2、3 章における説教と比較すると、この個所ではイエスを殺したのは単に「人々」となっており、断罪のモチーフは弱くなっている。だがこれをもって異邦人の罪はユダヤ人よりも軽いということは決して出来ない。なぜなら 43 節においてペテロは、旧約聖書の預言に基づき、イエスを信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられると宣言しているからである[21]。

このように考えるとペテロが語った説教はやはりイエス・キリストを救い主として宣言する説教であり、罪の赦しと悔い改めを迫る伝道的な説教であったと結論できる。そしてその説教は聖霊の注ぎによって中断された。これは神が彼ら異邦人を受け入れられたことの「しるし」であり、その結果、宗教的瑣末拘泥主義に終止符がうたれたのである[22]。

---

[19] マーシャル、227 頁

[20] 研究会Ｆグループ、『日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか』（いのちのことば社、2012 年）38 頁

[21] マーシャル（232 頁）はペテロがここでどの預言を念頭に置いていたのかははっきりしないと言っているが、可能性のある個所としてイザヤ 33:24、53:4-6、エレミヤ 31:34、ダニエル 9:24 などを挙げている。

[22] マーシャル、233 頁

C．まとめ

使徒 10 章におけるペテロの説教は一面においては聴衆のコンテクスト（異邦人）を十分に意識し、イエス・キリストの福音があらゆる民族、文化に対する超越性を持っていることを示す一方、罪の赦しはイエス・キリストにしかないこと、またイエス・キリストは救い主であると同時にさばき主であることも明快に説明している。またペテロは聖霊の働きをイエスに下った力として描き、聖霊の働きとイエスのミニストリーとを強く結び付けている。

おわりに

筆者は「使徒の働き」における三つの説教を取り上げ、必要な分析を加えた。ここからペンテコステ派教会がよく範例と考えている使徒たちの説教の特質は以下の五つである。

1．起こった奇跡的な事実をそれにとどめず、聖書によって意味づけること。

ペンテコステの日の説教においてペテロは、「甘いぶどう酒によっているのだ」といってあざける者たちに対して、この事象が極めて神学的な意義のあるものであることを、ヨエル書を引用して説明している。また当時すでにあったダビデの詩篇をメシア的に引用するという解釈法によって、イエスの復活を聖書によって弁証している。つまり初代教会における説教は単なる信仰者に起こった感動的な「証し」を縷々羅列するというものではなく、聖霊によって起こった特異な現象を聖書によって弁証し、解き明かし、神学的意義を付与するという機能を持っていたと考えることが出来る。

2．救い主であるキリストについて語ること。

本稿で取り上げた使徒 2、3、10 章におけるペテロの説教はどれもキリスト論的かつ救済論的性質を強く持っていることは疑いえない事実である。ペテロの説教をまとめたルカは、2 章全体の要約として「この曲がった時代から救われなさい」という命令を残しているが、この救いは死からよみがえられた主イエス・キリストの名を呼び求めることによってのみ現実となる。この主張は三つの説教に一貫した中心的な主題である。つまり初代教会におけるペンテコステの説教は聖霊の力によって語られたものではあるが、その内容はどこまでもキリスト中心的なのである。この事実は重い。というのもペンテコステ派である我々自身がしばしば自らの信仰を聖霊信仰と名乗り、また他派がペンテコステ派を見るときもしばしば「聖霊」「聖霊のバプテスマ」「異言」ということについて語ることが即ちペンテコステ信仰であり、またその説教だと思われている現実があるからである。しかしペンテコステ教会がその目標として尊ぶ初代教会におけるペンテコステの説教は、少なくとも今回指摘した三つの個所においてはその中心はキリスト論－救済論であることは明白である。そう考えるならペンテコステの説教、ペンテコステの信仰を自認するものが求めるべきはキリストのことを語らず、かえって闇雲に聖霊の神秘的な「力」を宣伝することではなく、かえって聖霊の力と知恵に溢れ、全人類、いや全被造物の救い主キリストを伝え、その証人となることなのである（使徒 1:8）。

3．罪の赦しと悔い改めを明瞭に語り、迫ること。

赦し（アフェシス）は新約聖書に 17 回出現するが、そのうちの 10 回はルカ—使徒に集中しており、間違いなくのルカの神学を特徴づけるモチーフである。それは今回概観したペテロの説教の中にも顕著であり、2:38、10:43 に見られるものである。また 3 章においても 19 節に「罪をぬぐいさっていただくため

に」[23] という類似の表現がみられる。勿論、我々が生きているコンテクストは初代教会のそれとは異なる部分があることは厳然たる事実であるから、毎回の説教に必ず罪の赦しと悔い改めが含まれなければ、ペンテコステ的（或いは聖書的）ではないというシボレテをつくることは行き過ぎであろう。しかしながら、他方において日本は未だに全人口の 99 パーセント以上がノンクリスチャンであり、何よりも伝道を志向しなければならない状況を考えるとき、罪の赦しと悔い改めを明瞭に語ることは規範的な価値を持つことは言うまでもない。

4．聴衆のコンテクストを理解していること。

今回取り上げたペテロの説教の内、前二者はユダヤ人的なコンテクストに向けて書かれているが、第三のものは神を敬う異邦人であるコルネリオに向けてなされたものである。ペテロは聴衆の違いに敏感であり、コルネリオへの説教においてはコルネリオの神に対する求めと飢え渇きに応えるように神の救いは民族文化を超えていくものであるという提示をしており、このことはペテロが説教者として、聴く側のことをよく意識していることを表している。とはいえ、ペテロは罪を語ることについて妥協しているということは一切ない。それは 10:43 において「罪の赦しが受けられる」と主張していることからも明らかである。翻って説教学においてはよく、聴衆のニーズや状況に敏感であれということが言われるのであるが、これは気をつけないと福音の持つ強さや厳しさを改変してしまうことになりかねない。ペテロの説教には私たちが参考にすべき聴衆への寄り添いと、不変の真理主張が見事に統合されている。

5．終末論的な視座を含む大きな物語を語ること。

三つの説教において語られた福音の物語は、旧約聖書が目指した成就という

[23] バークレーはこの語には「債務を免除する」という意味があると説明する。詳細は William Barclay, *A New Testament Wordbook* (London: SCM Press, 1955) を参照のこと。

意味で旧契約との連続性をみている。また 3:13 における「アブラハム・イサク・ヤコブの神、すなわち、私たちの先祖の神」という表現は端的にそれを表している。他方 3 章においてはキリストの初臨のみならず、その再臨とそれに続いて起こる万物の更新、即ち終末論的な救いについても言及している。つまり初代教会において語られた救いのメッセージは単なる個人の安心立命や現世的成功、さらには富と健康という救いを遥かに超えた、人間の根源的欲求である「人はどこからきて、どこへ行くのか」という問いに答えられる、大きな物語の提供であったのである。最近出版された本に『福音の再発見』[24]があるが、そこで指摘されているのは伝えられている福音が矮小化されているということであり、教会は大きな物語を取り戻さねばならないという主張がなされているが、そのヒントが今回取り上げたペテロの説教にはある。聖書が教えるペンテコステの説教は単なる聖霊充満と異言祈祷の奨励の連呼でも、あるいは富と成功の個人的な体験でもなく、人間の生を闇から光、裁きから救い、隷属から解放へと根本的に作りかえ、今生を超えていくイエス・キリストの福音の宣言なのだ。

ペンテコステ運動は使徒的信仰（Apostolic faith）の運動だともって自認する信仰運動である。だとすればペンテコステの説教は時代や文化の背景を考慮し、彼の日のペテロのそれと完全一致することはないにせよ、その性質においてやはり一定の類似を見るべきである。聖霊の著しい働きのみが説教中に「証し」として喧伝されるだけで、そこに神学的な意味づけが十分に為されないのであれば、それは説教者として怠慢であるとの批判を免れ得ない。また聖霊を強調するあまり、イエス・キリストがどこかへ行ってしまったような説教も残念ながらペンテコステの説教とは言えない。畢竟ペンテコステの説教とは、使徒ペテロが聖霊に満たされてイエスの福音を語ったということに尽きる。聖霊に燃えてという態度も大切だが、それ以上に大切なのは語られるべき内容である。キリスト教信仰はみこころに従い、十字架の死を体験されたイエスの信実に対

[24] スコット・マクナイト、『福音の再発見』中村佐知訳（キリスト新聞社、2013年）。

する信頼である。そのことを忘れ、聖霊のみを連呼する説教はペンテコステの説教とは言えない。聖書主義の弊を超えて、シンプルに聖書に聞き、イエスの福音を伝える教会でありたい。

（日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団　ベテルキリスト教会牧師）